

介護実習の代替プログラムにおける学修効果の検証 ～新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に伴う緊急対策～

桑迫 信子

The effects of an alternate program of care worker practice on students learning at M Junior College associated with COVID-19

Nobuko KUWASAKO

I. はじめに

2020 年に入り、爆発的な感染力をもつ新型コロナウイルス* (COVID-19 原因ウイルス：以下、コロナとする) が世界を震撼させた。本学も全関係者の安全を憂慮しながら、文部科学省・厚生労働省からの事務連絡¹⁾ に基づき、途切れのない学修支援に総力を尽くした。また、これらの社会的危機的状况において高齢者施設は多くの対策と制限を余儀なくされており、知識と経験が統合される介護実習（以下、実習）についても迅速に対処し整備する必要があった。

そこで、教育を継続させるための組織の管理体制として、1. 感染予防対策に関する生活指導の徹底、2. 体温および体調観察の記録、3. 学生および家族に体調変化がある際の連絡方法、4. 体調不良時の出席停止、等を学生に周知した。全国的にみても、各種専修学校（回答のあった全国 538 校）における登校の自粛は、4 月下旬から 5 月初旬までの期間で約 94%にのぼり²⁾、本学でも命に関わる最善の選択をしながら、履修への配慮や工夫を施した。そして、年間授業における授業型式を分類すると、遠隔で実施した日数は全体の約 53%であり、実習を代替で実施したのは約 51%に及んだ。

このような緊急事態での対策の一部を評価することにより、今後のあらゆる災害に経験として備え、学生への学修弊害をきたさない為の手立てとしたい。

II. 研究目的

実習の代替プログラムによる学修効果を明らかにすることで、緊急事態での教育的示唆を得る。

*新型コロナウイルス名は、SARS-CoV-2（重症急性呼吸器症候群コロナウイルス2）である。「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とその原因となるウイルスの命名について（WHO 2020年5月7日）」

Ⅲ. 研究方法

1. 期間：令和 2 年 7 月 6 日～7 月 22 日
2. 対象：M 短期大学 専攻科（福祉専攻）学生 24 名
3. 調査内容：実習Ⅱ・1（13 日間）終了後の自己評価で、同意の得られた 18 名の記載内容とする。
4. 調査方法：言葉のデータをカテゴリー化し、抽象度を上げながらまとめていく質的帰納法を用いる。
5. 用語の定義：自己評価とは、実習目標に沿って自由に記述したものである。
利用者とは、介護サービスを必要とする高齢者である。

6. 分析手続き

1) 分析手順

教員 2 名で自己評価の読み取り作業を行い、1 文 1 意味になるようナンバリングし整理した。また、不明な文については、表現の誘導にならないよう注意しながら個別の聞き取り確認をした。整理した全ての文に下位概念としてラベル名をつけ、さらに KJ 法で類似する内容を中位概念としてまとめ、サブカテゴリーとした。最後に上位概念のカテゴリー【学び】として件数とともに整理した。

2) 分析データの信頼性

データの信頼性を得るため、数回にわたりナンバリングされた 1 文と抽出された概念とのズレが生じていないか確認した。

7. 倫理的配慮

学生に、研究趣旨と研究参加による不利益のないことを口頭説明し、提出により同意が得られたものとした。そのデータは研究者が厳重に保管し、学生の記述した内容から個人が特定できないよう連結不可能匿名化とした。

Ⅳ. 実習の実際

1. 学生の特徴とレディネス

属性は、保育士養成課程の短期大学で、卒業後に専攻科（福祉専攻）に入学し、1 年間の学修により介護福祉士の国家試験受験資格を取得できる養成校である。実習は年 4 回実施し、拠点となる実習指導課がある。年齢構成は、21～23 歳で女性 22 名と男性 2 名の日本人学生である。出身は、全て県内および近隣で、住居は独居 5 名、寮 2 名、自宅 17 名である。通学には主に自家用車や公共交通機関を使い、所要時間は最大 1 時間 30 分を要する。実習場所は、移動に都合の良い施設を選定する。

組織全体の感染予防対策として、対面と遠隔での学修方法を随時変更させ、時間外学習や課題を組み合わせた不規則な授業形式であったが、進度は例年通りであった。技術演習は、まず Web 上で単元導入及び知識面の内容を優先させ、評価に Google Forms などを活用した。技術面は、対面授業が可能となった際にまとめて指導し、留意点が確認できるよう一部の教材を You Tube にて公開した。また、実習においては県内の感染状況を鑑み予定変更の可能性を告知しており、感染の恐れや学修への影響について不安を表出する学生がいた。実習施設の確保が困難で、実習Ⅰを約 1 ヶ月延期したが、沈静化の兆しはなく学内代替演習を決定し実施した。それに伴い実習Ⅱ・1 も実施時期をずらし

た（表 1）。

表 1 実習実施予定と変更

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月
年間実習予定		実習 I	実習 II-1		実習 II-2
変更後(内容)			実習 I (学内代替演習)	実習 II-1 (複合型)	

2. 実習 II-1 の目標

実習 I では、「施設の特色」「高齢者コミュニケーションの特徴」「介護福祉士と多職種の役割」「多様な介護サービス」「認知症」の内容を、視聴覚教材と文献学習、出前授業、ディベートやロールプレイングなどを活用し間接的に学修した。

この年代の特徴として、日常における高齢者との会話や支援場面に接する生活体験が少ない。そのため、実習 II-1 では目標（表 2）に沿って、実習 I の内容も含めた直接的な学びを期待した。

表 2 実習 II-1 目標

- 目標 1. 生活の場における個別ケアの理解と自立につながる生活支援を学ぶ。
- 目標 2. 介護過程に取り組み、健康状態、心身機能・身体構造、活動、参加の生活機能を中心として、利用者のより良い生活を支援するために必要な情報を収集する。

3. 実習 II-1 の実施スケジュール

実習予定 1 ヶ月前に、施設における実習指導者への聞き取り調査を行った結果、予定した施設の約半数しか受入確保できず、13 日間の実習を解体し複合型構成とした。内訳は、5 日間の施設実習と 8 日間の学内代替演習である。

また実習は、学生全体を A 班と B 班に分け、5 日間ずつの入れ替え制とすることについて施設の同意を得た。（表 3）

表 3 実習 II-1 施設実習と学内代替演習での複合型実習

月	火	水	木	金	土	日
7/6 A 班施設 B 班学内	7/7 A 班施設 B 班学内	7/8 A 班施設 B 班学内	7/9 A 班施設 B 班学内	7/10 A 班施設 B 班学内	7/11	7/12
7/13 B 班施設 A 班学内	7/14 B 班施設 A 班学内	7/15 B 班施設 A 班学内	7/16 B 班施設 A 班学内	7/17 B 班施設 A 班学内	7/18	7/19
7/20 全員学内	7/21 全員学内	7/22 全員学内				

※言葉の意味：「施設」とは「施設実習」で、「学内」とは「学内代替演習」を示す。

IV. 結果

目標 1 の「生活の場における個別ケアの理解と自立につながる生活支援を学ぶ」については、101 件のデータが得られた（表 4 ①、表 5）。【学び】の内容としては、「実習による手応えのある学習効果と、介

「福祉職の役割責任の気づき」が最も多く、全体の 22.7%であった。次に、「介護過程の重要性」を学び、「残存能力の維持と向上」、「自立度の違いに合わせた生活支援」の技術内容へと続いた。その他にも、「身体的、精神的、社会的情報とアセスメントの重要性」、「自立支援の重要性」への学びや、「自己決定と自立への尊厳」の意識の高まり、「介護者の人間性と力量」の援助に与える影響、「多職種連携と情報共有」の意義、「個性への尊厳」などがあつた。

目標 2 の「介護過程に取組み、健康状態、心身機能・身体構造、活動、参加の生活機能を中心として、利用者のよりよい生活・人生を実現するために必要な情報を収集する。」については、88 件のデータが得られた（表 4②、表 5）。件数の多かった内容として、「情報収集から分析過程までの学びと利用者理解」が 46.5%で実習全体としても最も多く、次に、「コミュニケーション技術の重要性の気づき」19.3%、「情報の分析過程から抽出されたニーズの発見と利用者理解の促進」15.9%も、介護過程の重要な要素である。その他、「実習による学習効果」の高まりの実感や、「実習生としての学習態度」の大切さに気づいた積極的学習者もいた。また、目標 1 と同じく「多職種連携の意義」や「利用者との信頼関係」についても、成功または失敗体験など何らかの形で学びとして受け止めていた。

表 4① 目標 1 に対する【学び】の内容とデータ比較

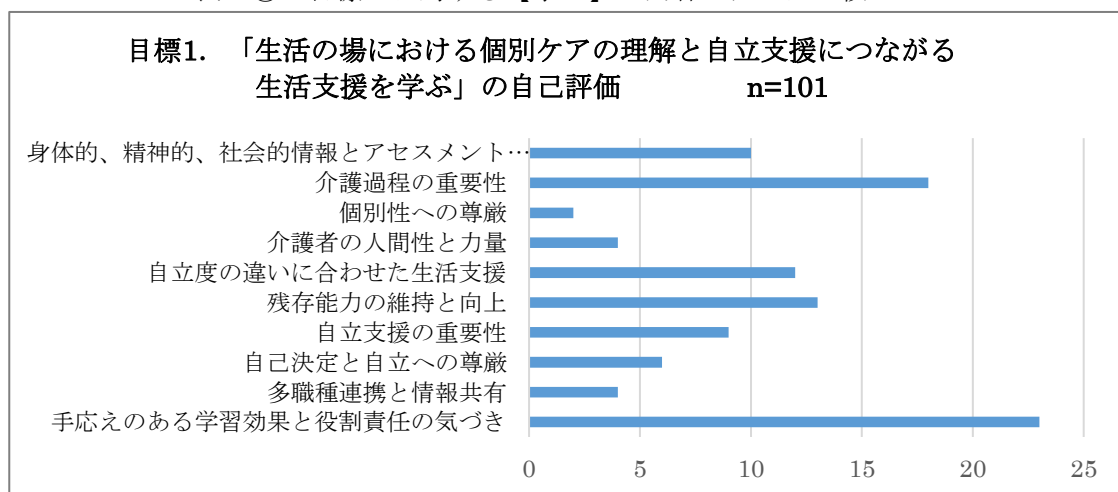


表 4② 目標 2 に対する【学び】の内容とデータ比較

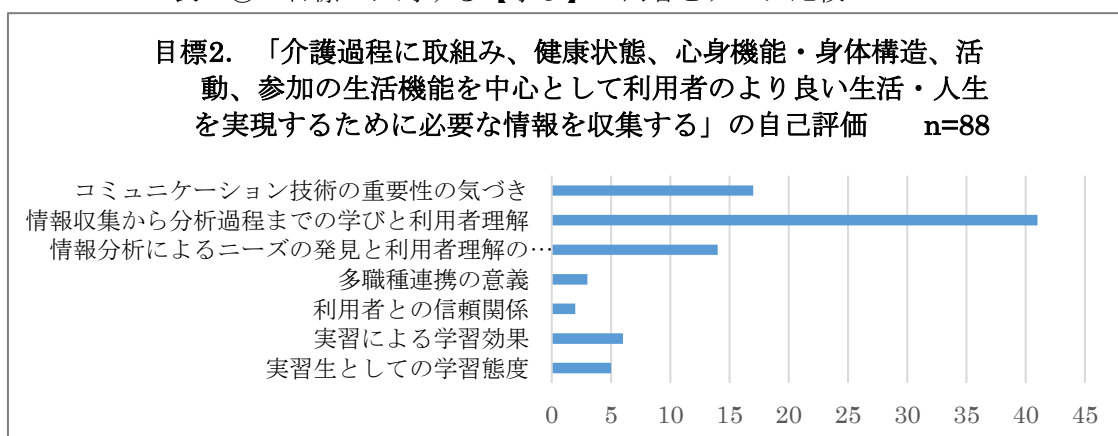


表 5. 実習Ⅱ-1 自己評価で抽出されたカテゴリーとサブカテゴリー

目標 1.生活の場における個別ケアの理解と自立支援につながる生活支援を学ぶ		
カテゴリー【学び】	サブカテゴリー	データ数(%)
身体的、精神的、社会的情報とアセスメントの重要性	観察と評価による個別情報(身体、精神、社会)の重要性	10(9.9)
介護過程の重要性	個別性を重視した介護支援(介護過程)	18(17.8)
個別性への尊厳	個別性への配慮による尊厳の重要性	2(1.9)
介護者の人間性と力量	個別性を理解することによる介護支援の重要性と難易性	4(3.9)
自立度の違いに合わせた生活支援	自立度の違いを評価することによる効果的な生活支援	12(11.8)
残存能力の維持と向上	残存機能の維持による自立度の向上	13(12.8)
	日々の観察による残存機能の発見	
	残存能力を活かすことによる生活支援	
自立支援の重要性	過剰介護による自立妨害	9(8.9)
	根拠を追求することによるケアの質向上	
自己決定と自立への尊厳	自分で決定し、自立を維持・向上させる支援による尊厳への意識の高まり	6(5.9)
	基本理念を意識することによる積極的自立支援	
多職種連携と情報共有	多職種連携による情報共有	4(3.9)
手応えのある学習効果と、介護福祉職の役割責任の気づき	学内演習と直接実習を組み合わせたことによる連続した学習効果	23(22.7)
	直接実習による知識不足の気づき	
	直接実習による手応えのある学習効果	
	直接実習によるコミュニケーションの学習効果	
	直接実習による施設利用者の特徴と生活環境の学習の機会	
	直接実習による役割責任の学習の機会	
	直接実習による安全への配慮の学習の機会	
		合計 101

目標 2. 介護過程に取組み、健康状態、心身機能・身体構造、活動、参加の生活機能を中心として、利用者のより良い生活・人生を実現するために必要な情報を収集する。		
カテゴリー【学び】	サブカテゴリー	データ数(%)
コミュニケーション技術の重要性の気づき	会話による自然に安心できる支援活動	17(19.3)
	受容と傾聴によるコミュニケーション技法の重要性	
	コミュニケーションによる重要な情報収集	
情報収集から分析過程までの学びと利用者理解	情報媒体の活用による情報収集技法の理解	41(46.5)
	情報分析過程による利用者理解	
情報分析によるニーズの発見と利用者理解の促進	情報分析によるニーズの発見と援助の展開	14(15.9)
	情報による利用者理解の促進	
多職種連携の意義	多職種との情報共有による連携の実践	3(3.4)
利用者との信頼関係	日常会話による信頼関係構築	2(2.2)
実習による学習効果	直接実習による学習効果	6(6.8)
実習生としての学習態度	実習生としての学びの姿勢	5(5.6)
		合計 88

V. 考察

1. 実習目標に沿った学び

実習の醍醐味は、生の教材から得る刺激で、専門的視点での介入による直接的体験とその感動にあると感じている。藤岡は、実習を「実践知」と位置づけ、身体を通して物事を知るという知のあり方であるとした。「客観的」「論理的」に説明できない「経験」に、専門職としての人格が反映された自己と技術の一体であり重要な意味を持つ³⁾と教示している。学生にとって初めての経験となる今実習は、短期間ではあったが利用者の特徴に触れ会話などをとおして「できた、分かった」という成功体験や、逆に悩みながら課題を見出すことを可能とし、多くの学生が手応えのある学習効果を実感していた。また、緊張感の中で介護場面を見学できたことは、技術の確認ばかりではなくモデリングとなり、介護福祉職の役割や責任に気付くことで介護観育成にも影響を与えたものと思われる。また、全体的に最も多い学びの内容としては、利用者とのコミュニケーションをはじめ、介護記録などの情報媒体から情報収集したことと、それを活用することで利用者理解を促進することができたという達成感や有効性の実感である。さまざまな機能低下をきたした利用者と、直接会話をすることでコミュニケーション技術の重要性を学び、集まった情報を基に個別性に応じた生活支援が可能となることを学んでいる。黒澤は、出会いから始まった人間関係は、人格の触れあいと相互を尊厳する過程でコミュニケーションをとおして主体的に深まる⁴⁾と述べている。実習は出会いの場となり、老いや心情などを学ぶ貴重な経験となった。しかし、信頼関係や尊厳への配慮の必要性に気づいたものの、それを深めるまでに及ばなかったのは今実習の限界でもある。今後、時間をかけた交流やそれに伴う共感や洞察力の向上、個別性を理解する学習の機会があることを期待したい。その他、コミュニケーション技法や情報媒体活用への課題、複数の問題を抱えた事例の情報整理に困難を要する学生もいたが、それも含め短期間でも学習への大きな影響力を生み出したと言える。これを無駄にせず、置かれた学習条件の中で多くの資源を活用し、効果的な学びができるよう支援する必要がある。

この5日間の実習で得られた内容は、専門性を学ぶための重要な教材である。そこでそれらを基に、学内演習にて情報分析の指導をした。最も留意した点は、複合型構成である実習と学内演習の関連性を保ちながら、目的に沿った学びとなるよう展開させることであった。これまでの知識を実習にて確認したり、不足した知識を学内で調べたり技術確認をするための時間となった。

その他学内では、学習空間の換気や過密にならない配慮をしながら、仲間と共通した目標達成のために相互貢献の実感を味わえる協同学習⁵⁾を多く取り入れた。中でも、自分の行動と技術の留意点を意識することに意義のある⁶⁾ ロールプレイングでは、技術確認や動作の科学的根拠、ボディメカニクスを意識させた。そして、利用者の身体的・精神的理解と介護職の専門的思考の発展を期待し⁷⁾、事例に基づく介護技術発表会を実施した。同じ『足浴』でも多くの創意工夫があることに気づき、「技術確認に時間をかけ練習になった、友人の意見は参考になった」などの感想が聞かれた。

2. 学修支援上の配慮

実習前の学生は、少なからず未知なる学習環境での孤独感や実習記録への不安をつのらせる。しかし今年度は、入学直後から遠隔授業で孤独な寂しさに耐え、学修への不安を抱える学生も多く、学友と共に対面で学ぶ喜びを表出していた。今実習での高齢者レクリエーション演習などは、仲間意識を高めるのに有効だったと思う。該当はなかったが、他者との協同活動を苦痛と感じる学生への配慮⁸⁾につい

ても心に留めておく必要がある。また学生は、施設の感染防止対策や行動制限の厳しさは報道などで理解していた。実習Ⅰが実施できなかった分、実習を貴重な機会と受け止め、積極的学習者になろうと意欲を高めた者もいた。その他、公共交通機関での感染を危惧し、登学手段を変える学生もいた。

以上のことより、教員と学生との連絡や教員間の更なる情報交換を行なうと共に、実習先への依頼事項として、「1. 遠方や公共交通機関利用の実習生の、混雑する時間帯を避ける実習時間の調整。2. 記録整理を課題とすることで、施設滞在時間を調整する工夫。3. 実習生の健康観察チェックシートの確認と、消毒薬の携帯および不織布マスク着用の共通理解。4. 実習生入室手順や順路、更衣室および休憩室の使用方法、教員巡回指導場所などの確保。」を確認し、双方にとっての無危害への配慮と学修上の不安の解消に努めた。

複合型実習構成はコロナ感染防止対策の応急的な措置ではあったが、実習先の協力が得られたことで実施が可能となった。そこで、何よりも“後進育成の為”とする施設関係者の思いを学生に伝える必要があった。実習できることをこんなにも喜び、感謝の気持ちや意欲が向上したのは、それら受入れる側の熱意によるところが大きい。また、学生が自主的に各班で申し送りを行い、見通しをもって実習に臨むことができていたのも思わぬ効果であった。

VI. まとめ

施設実習と学内代替演習を組み合わせた複合型構成の型式であっても、実習目標と実習期間を同じくし、相互に連携させることで目標に沿った学修ができることが示唆された。以下の内容を緊急時における教育体制のまとめとし、国や自治体および組織の指示に従い弾力的に対応したい。

また、今回使用した自己評価は、学生の主観的な自由記載である。学生の満足感や達成感、個人の感覚的要素が多く関与している⁹⁾と言われるように、性格や表現力などにより偏りが発生することに加え、各技術の到達度を評価したものではないことを付加する。

<授業と実習の整備>

1. 緊急時においては、対面と遠隔および時間外学習など授業構成を工夫し、カリキュラムに沿った授業を実施する。
2. 途切れの無い授業展開をしながら実習を準備し、できる限り本来の実習ができるよう整備する。
3. やむを得ず実習日数を短縮した場合はそこでの到達度を明確にし、学内代替内容との連続性を重視しながら全体の目標達成を図る。
4. 実習全てが代替となった場合、目標に沿った学びとなるよう早急に教育体制を整備する。
5. 学内代替演習では、協同学習による役割体験等を取り入れ、知識と実践力の育成を図る。

<学習環境の整備>

6. ICT (Information and Communication Technology : 情報通信技術) など活用し、個人指導やクラスの連帯感を感じられる機会を大切にする。
7. ICT 活用に際しては、学生の器機の所持や Wi-Fi 環境を把握し、教務課と連携し対処する。
8. 実習指導課を拠点として地域関連施設との連絡を密に行いながら、より良い関係性を保つ。

＜健康と安全＞

9. 体調管理を徹底し、連絡体制や対処法については組織全体の指示を周知し実行する。
10. 本人および本人に関わる家庭問題を把握し、孤独感や不安感など心のケアを行う。
11. 遠方から登学する学生など、各種交通機関等の過密回避に配慮する。

VII. おわりに

緊急時においては、限られた条件の中で学修環境を整えることは教育者の使命である。それと同時に、学生を慮った多くの関係者の熱意があり、人間性の育成に重要な要素であることを再認識した。また、学生一人ひとりの心がけて健康を維持できたことは最大の喜びであり、その真摯な思いが教育の原動力となったことは言うまでもない。

謝辞

本研究にご協力をいただいた専攻科（福祉専攻）の学生、ならびに実習施設関係者の皆様に心より感謝いたします。

＜参考資料、参考文献＞

- 1) 文部科学省・厚生労働省からの事務連絡（令和2年2月28日付）
新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について
- 2) 「専門学校における遠隔教育に関するアンケート調査」の一部「登校自粛に関する集計」（一般社団法人全国専門学校情報教育協会調査集計結果）
<https://www.invite.gr.jp/investigation/index.html>（2020.5.7）
- 3) 藤岡完治ほか著：学生と共に創る臨床実習指導ワークブック、第1版、医学書院、1997.
- 4) 黒澤貞夫著：介護福祉の「専門性」を問い直す、中央法規出版、2018.
- 5) 安永悟：協同学習の基本的な考え方と方法、宮崎学園短期大学2019年度FD推進校育委員会企画研修会（2019.9.26）
- 6) 藤澤珠織ほか：技術演習で患者役割・看護師役割を演じることで得られた患者の気持ちの理解と援助技術の留意点に関する研究、青森中央短期大学紀要（27）、109-116、2014-03.
- 7) 長島緑ほか：障害疑似体験・介護体験演習が学生に及ぼす学びの質的分析、つくば国際短期大学紀要（34）、113-122、2006-06.
- 8) 岡村季光：居場所（安心できる人）の評定と自己・他者認識：協同作業認識との関連、奈良学園大学紀要（10）、163-169、2019-03.
- 9) 片山由美ほか：臨地実習において学生が満足・不満足であるとした場面の検討、京都大学医療技術短期大学紀要（22）、2002、53-65.